様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：３４４４５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３８１１０５

研究課題名（和文）保育者の自己評価能力向上のための保育実践における「保育プロセスの評価指標」の開発

研究課題名（英文）The development of "evaluation indicators of child care process" in the caregivers of childcare practice for the self-evaluation capacity building

研究代表者
瀧川　光治（TAKIGAWA, KOUJI）

大阪総合保育大学・公私立大学の部局等・教授

研究者番号：４０３４０９３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：保育プロセスの評価においては、「形成的アセスメント」」の枠組みを採用するほうが良いことが示された。
とくに、遊びの見取りの視点は、情緒な安定をベースとして「子どもの思いやめあて」「子どもと他児・保育者との関わり」「子どもとモノ（物的環境など）との関わり」を読み取り、さらにその遊びや活動に特有の視点を持って読み取ることが有益であることを示した。そして、ルーブリックのような枠組みで遊び（保育プロセス）を評価するための指標が提示可能なことを示した。

研究成果の概要（英文）：Evaluation of the child care process, is a good way by the formation assessment.
In addition, at the time of assessment whether the playing how the children, emotional stability and, it is necessary given the child's thoughts and mercenary.
The evaluation of the child care process, it is possible to create a table as a rubric.

研究分野：幼児教育・保育学

キーワード：保育実践　保育方法　自己評価　評価指標　形成的アセスメント　遊び　観点　育ち

１．研究開始当初の背景

（１）経緯

研究代表者、研究分担者らは、これまで「保育内容の構造化」「保育の振り返り・自己評価」「保幼小の連携・接続」「子ども同士の人間関係」「カリキュラム・幼児教育課程論」「多文化共生保育実践」などを主なテーマとして研究に取り組んできた。

とくに研究代表者は、「保育内容の構造化」および「幼小の接続」の研究を踏まえた「保育の振り返り・自己評価」の研究において、保育の実践を振り返り、自己評価していくためには、当たり前ではあるが、子どもの遊びから体験・経験を読み取る視点、何を振り返り・自己評価することが、明日や明日以降の保育の改善につながるのかを、保育者自身が自覚することが大切だと考え、そのための手法の開発と園内研修システムの構築のために取り組んできた。

これらの研究の中で、新たな課題として「保育者自身の自分の保育や子どもの遊びについての自己評価能力（アセスメント能力・モニタリング能力）の向上が、保育の質の向上に欠かせない」ということが浮かび上がり、本研究の着想にいたった。そのためには、さまざまな遊びや活動の展開における「保育プロセス」についての評価指標（アセスメントあるいはモニタリングのための指標）の開発が必要だと考えている。

（２）本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ

指導計画作成や保育内容を構想していくにあたって「保育を振り返ること」「幼児理解（子ども理解）」は、「振り返り、課題を見つけ、改善を図るサイクル」（秋田,2009）の中で欠かせないステップであり、保育現場にとっては古くて新しい課題である。保育の質を維持・向上させていくためには、園外研修の受講や、各園における園内研修・保育カンファレンスなどの組織的な取り組みと同時に、各クラス担任における保育実践の「振り返り」「自己評価」が必須である。

保育実践においては、2008 年 3 月の「保育所保育指針」の改定後は「計画に基づく振り返り」（PDCA ｻｲｸﾙ）や、小田豊・中坪史典ら(2009)が提案するような「保育実践ｻｲｸﾙ」（幼児理解→保育計画（デザイン）→保育実践→省察）といった保育の振り返りの枠組みが提案されるようになってきている。

そのような中、保育の過程（プロセス）評価の手法としては、ベルギーのラバース教授が開発した「ＳＩＣＳ」が注目され、秋田・小田ら(2010)がその日本語版『子どもの経験から振り返る保育プロセス』を作成しており、そこでは「安心度（Well-being)」と「夢中度(involvement)」という２つの尺度から、子どもの経験を読み取り、そこから保育を振り返り、次への保育につなげていくことが提唱されている。

保育の振り返り・自己評価は、その日やそれまでの保育において「自らの保育実践の振り返り」及び「子どもの変容する姿を捉えること」（厚生労働省,2009）によって、ある活動から次の活動の多様な展開を如何に想定して、学びや経験をつないでいくかといった「体験の多様性と関連性」（要領,2008；無藤隆,2009）の検討を行い、それを指導計画や保育の構想や実践に活かしていくことが重要である。しかしながら、個々の保育者レベル、とくに経験年数の浅い保育者においては、日々の保育日誌や保育記録は業務の一環として記述するが、それを生かし切れていない保育者も少なからずいる。

そのため，＜その日の保育の振り返り＞及び＜振り返りから構想へ＞を具体的な保育実践に照らし、「保育者自身の日々の遊びや活動の振り返りを翌日以降の保育につなげるための視点・思考の枠組み」を構築し，ごっこ遊びや身体表現活動、造形活動などの典

型的な遊びや活動の展開における「保育プロセス」についての評価指標（アセスメントあるいはモニタリングのための指標），すなわち「保育プロセス評価指標」を部分的にも開発していくことが必要であると考えられる。

２．研究の目的

そこで、本研究は、保育者自身の自己評価能力(遊び・活動を読み取り、活動を構想する能力)向上に寄与するために、保育実践における「保育プロセスの評価指標」（遊び・活動から何を読み取り、どのように次の遊びや活動を構想するのかの観点や指標）の開発を行うものである。

それゆえ本研究においては、次の２つ(A・B)をテーマとし、それらを統合することが目的である。(A)「保育者自身の日々の遊びや活動の振り返りを翌日以降の保育につなげるための視点・思考の枠組み作り」，(B)「ごっこ遊びや身体表現活動、造形活動などの典型的な遊びや活動の「保育プロセス評価指標」の開発」。

本研究では、申請者らのこれまでの研究や保育現場への指導助言を踏まえ、新たにアクション・リサーチと位置づけて研究を行うことで、保育現場に還元しうるような「保育プロセスの評価指標」を部分的であっても提示し、そのハンドブックを作成する予定である。

３．研究の方法

（１）調査①文献調査〔全員〕

保育の振り返り・自己評価について書かれている文献（書籍・論文・雑誌記事等）の調査を行い、そこで提示されている「観点・視点」と「手法」についてレビューを行う。

（２）調査②　インタビュー調査Ａ

保育の振り返りと、体験と学びをつなぐための保育内容の構想について難しいと感じていることや、遊びの見取り（アセスメント・モニタリング的な視点）をどのような観点で持っているかなど、インタビュー調査を行う。その分析を踏まえて、「振り返りや保育内容の構想」の課題を明らかにし、提案を行う。

（３）調査③インタビュー調査Ｂ、及びフィールド調査

フィールド調査協力園３０か所のうち主要な園１０か所において、インタビュー及び、フィールド調査を実施する。

この調査は主として、その日の午前中に保育を観察し、午後から、その記録（写真、ビデオ、メモなど）をもとに、「アクテイブラーニング型の園内研修」として実施する。そこでの保育者自身の遊びや子どもの姿の読み取りや、気づき、先への見通しなどをデータとして収集し、分析を行う。

４．研究成果

（１）文献調査より、以下の点が指摘できる。

①　子ども理解に基づいて保育を構想するためには、「遊び・活動の内容(学び)」と「他児との関係性(協同性)」の一体的な子ども理解、および外から見える様子を土台に内面(楽しさ・学び・関係・自己等)の理解が必要であること。

②　「活動の広がり」とは「活動の多様な展開を意味し、目の前の活動が、他の活動とつながりを持ったり、他の活動へと派生していく」こと、「活動の深まり」とは「活動が発展していく中で、探索・探究的な要素が膨らみ、さらに究めていくといった目的志向性が高くなっていく」ことを意味すること。

③　①②を踏まえて、「遊び・活動の内容(学び)」の「広がりと深まり」から育ちの方向性を見通すと同時に、「他児との関係性(協同

性)」の「広がりと深まり」から育ちの方向性を見通し、「活動と活動をつなぐ」ように保育を構想することが必要であること。その際、子ども達がその活動を楽しい（心を動かされる）と感じることにより、活動が継続し、広がりと深まりを持ったものになっていくこと。

（２）探索・探究的な活動のフィールド調査により、下記の点が指摘できる。

探索・探究的な活動の「広がり」を見通して保育を構想するためには、活動内容としての多様な素材への広がり、その活動・題材から他の活動・題材への広がりとともに、気付きの広がり、人の輪としての広がりとして保育を構想することが必要である。一方、「深まり」を見通して保育を構想するためには、目の前の探索・探究的な活動の中での子どもの学び（気づきの内容やそこに含まれる概念等）を踏まえて、それを次の活動に生かして、発展して、活動が深まるように保育を構想することが必要である。

また、子どもたちの活動は、「広がりながら深まる」「深まりを追求する中で広がる」といように広がりと深まりは不可分なものであるので、いま目の前の子どもの探索・探究的な活動での「その活動の内容(学び)」と「他児との関係性(協同性)」を理解しながら、どの方向に進んでいくのか、また保育者としての「ねらい」を踏まえて、広がりと深まりの観点から保育を構想することが求められる。その際、その活動中の問題解決の過程で、子どもたちが何に心を動かされて取り組んでいるのかという情動的な側面も捉える必要がある。

（３）これらを踏まえて、以下のことを示した。

１：保育プロセスの評価においては、「形成的アセスメント」「ダイナミックアセスメント」の枠組みを採用するほうが良いこと。（査定という意味での評価ではない）

２：安心して遊びに入れているか、自分の気持ちや思いを自己発揮しながら遊べているかどうかという評価がベースに必要であること。

３：遊びや活動の質的変化や展開を捉えていくためには、その遊びや活動に取り組んでいる姿を捉え、「何に心を動かされているか」といった子どもの思いやめあて（心情・意欲）の読み取りと形成的アセスメントが必要であること。その際、SICS の夢中・没頭の評価指標は有用であること。

４：遊びの見取りの視点は、情緒な安定をベースとして「子どもの思いやめあて」「子どもと他児・保育者との関わり」「子どもとモノ（物的環境など）との関わり」を読み取り、さらにその遊びや活動に特有の視点を持って読み取ることが有益であること。そのために保育中だけではなく、保育中の子どもの様子の写真を使う方法も有益であること。

５：そのような考え方をもとに、いわゆるルーブリックのような枠組みで遊び（保育プロセス）を評価するための指標が提示可能なことを示した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

瀧川光治(2015)「子どもの気付きを広げ、深めるための保育方法」エデュケア第 35 号、pp19-33

瀧川光治(2015)「写真を活用した保育の振り返りと園内研修の手法」大阪総合保育大学紀要第 10 号、pp287-297

〔学会発表〕（計２件）

北野圭子・<u>瀧川光治</u>（2015）「遊び の見 取り や見通しのための園内研究（1）－本園の

実践から－」日本保育学会第６８回大会ポスター発表（5 月 10 日）
瀧川光治・北野圭子（2015）「遊びの見取りや見通しのための園内研究（2）－方法論の整理－」日本保育学会第６８回大会ポスター発表（5 月 10 日）
瀧川光治・北野圭子（2016）「遊びの見取りや見通しのための園内研究（3）―写真を使う方法―」日本保育学会第６８回大会ポスター発表（5 月 8 日）
北野圭子・瀧川光治（2016）「遊びの見取りや見通しのための園内研究（４）」日本保育学会第６８回大会ポスター発表（5 月 8 日）

〔図書〕（計　２　件）
那須信樹,矢藤誠慈郎,野中千都,瀧川光治,平山隆浩,北野幸子(2016)『手がるに園内研修メイキング みんなでつくる保育の力』わかば社
徳安敦・瀧川光治・杉浦広幸編(2016)『生活事例からはじめる―保育内容―環境』青踏社

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：
○取得状況（計０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
瀧川　光治（TAKIGAWA KOJI）
大阪総合保育大学・児童保育学部・教授
研究者番号：40340939

(2)研究分担者
卜田　真一郎（SHIMEDA SHINICHIRO）
常磐会短期大学・幼児教育学科・教授
研究者番号：20353021

無藤隆(MUTO TAKASHI)
白梅学園大学・子ども学部・教授
研究者番号：40111562

新開　よしみ(SHINKAI YOSHIMI)
東京家政学院大学・現代生活学部・教授
研究者番号：50369352

小寺　玲音（KOTERA RENE）
頌栄短期大学・幼児教育学科・講師
研究者番号：50369691

砂上史子（SUNAGAMI FUMIKO）
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号：60333704

吉永早苗(YOSHINGA SANAE)
ノートルダム清心女子大学・人間生活学部・教授
研究者番号：80200765

(3)連携研究者
　該当無し